佐左木俊郎選集

佐左木俊郎選集

昭和五十九年四月十四日初版発行

定価八、〇〇〇円

著者　佐左木俊郎

発行者　佐々木　峻

発行所　株式会社　英宝社
東京都千代田区三崎町一―一―八
電話東京〇三―二九二―〇一六七～九
振替東京　六―一五七（☎二〇一―九一）

製作　共同欧文センター

凡例

一　この選集を一巻にまとめるため、「明日の太陽」「狼群」「恐怖城」等々の長篇小説は省かざるを得なかった。

一　短篇小説のうち、農民文学を〈小説第一〉とし、猟奇小説と推理小説とを〈小説第二〉とした。また一般の小品と掌篇とを〈小品第一〉、少年少女向きの作品を〈小品第二〉、そして作者自身の身辺、郷土のことにふれた断章を〈小論文その他〉として便宜上分類してある。

一　各分類ごとの作品の配列は、多少の例外もあるが、おおむね発表年代順に、発表誌未詳のものは執筆年代順に従った。

一　原稿の残存するものは原稿を、その他は掲載の印刷物を底本に校訂は厳密を期したが、五十年以上も経過しているために、印刷不鮮明等もあり、完全とは言いがたい。

一　表記は、新かなづかい及び大部分を通用漢字に改めた。また、ふりがな、送りがな等にも、作者の意図を損わない程度に、読み易くなるよう配慮した。

一　著作目録は別にもうけず、巻末の〈年譜〉の項に含めた。

佐左木俊郎選集

目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説第一

緑の芽 ／ 三
土竜 ／ 七
馘首 ／ 一六
駈落 ／ 二七
蜜柑 ／ 三三
都会の触手 ／ 三九
馬と人間との間 ／ 四九
山茶花 ／ 六二
暴風に別れる言葉 ／ 六六
運命を手繰る者 ／ 七五
桑を植える繭商人 ／ 八二
売物 ／ 八八
或る浮浪者 ／ 九八
裏面 ／ 一〇四
鵞鳥 ／ 一一三
田舎医者の手帳から ／ 一二三
再度生老人 ／ 一三八
鉄と土地と人間との話 ／ 一三四
熊の出る開墾地 ／ 一四五
或る部落の五つの話 ／ 一五八
黒い地帯 ／ 一六三
脚気病患者 ／ 一七五
悪い仲間の話 ／ 一八五
都会地図の膨脹 ／ 一九一
喧嘩 ／ 二〇〇
暴風雨地帯 ／ 二一三
森林管理者 ／ 二三五
殺戮 ／ 二四一
旱魃 ／ 二五〇
夜の部落 ／ 二六二

墾成不可能地帯　／　二七四
馬　／　二八七
芽は土の中から　／　二九四

小説第二

指　／　三三五
指と指環　／　三三七
錯覚の拷問室　／　三三三
猟奇の街　／　三四五
街頭の偽映鏡　／　三五七
秘密の風景画　／　三六九
或る犯罪の動機　／　三七四
秘密の錯覚幻想　／　三八四
仮装観桜会　／　三九一
狂　馬　／　四〇三
仮面の輪舞　／　四〇五
謀殺罪　／　四三九
密会綺譚　／　四四八
恋愛・導火線の傍らから　／　四六〇
街底の熔鉱炉　／　四六四
猟犬物語　／　四七一
嘘を吐く愛人　／　四八〇

小品第一

首を失った蜻蛉　／　四九五
桐の花　／　四九九
芋　／　五〇一
郷　愁　／　五〇四
消　息　／　五〇六
汽　笛　／　五〇九
接吻を盗む女の話　／　五一三
機関車　／　五一八

機関車乗務挿話 ／ 三二四
秋草の顆 ／ 三二六
悪童共和国 ／ 三三〇
薄紫の光線 ／ 三三三
夏の夜の出来事 ／ 三三七
城 ／ 三四〇
影の建築師 ／ 三四三
十 年 ／ 三四九
雪 渓 ／ 三五三
栗の花の咲くころ ／ 三五四
手 品 ／ 三六一

小品第二

父よいずこに ／ 三六七
曼陀羅華 ／ 三七一
踏み躙られた薔薇 ／ 三七七
遺 産 ／ 三八三
碧紫色の貝殻 ／ 三八九
愛の面影 ／ 三九一
乳房の貞操 ／ 三九八
喫煙癖 ／ 六〇五

小論文その他

我が農民文学論 ／ 六〇九
文学に現れたる東北地方の地方色 ／ 六一〇
荒雄川のほとり ／ 六一六
季節の植物帳 ／ 六二七
骨を削りつつ歩む ／ 六三一
簡略自伝 ／ 述懐 ／ 六三五
*
年 譜 ／ 六三七
編集後記 ／ 六四五

小説第一

緑の芽

一

弾力に富んだ春の活動は、いたるところに始まっていた。

太陽は燦爛と、野良の人々を、草木を、鳥獣を、すべてのものを祝福しているように、毎日やわらかに照り輝いた。農夫は、朝早くから飛び起きて、長い間の冬眠時代を、償おうとするかのように働いていた。

菊枝はまだ床の中で安らかな夢に守られているらしかった。父親は、朝飯前にと、近所へ出掛けたきり、陽は既に高く輝いているのにまだ戻らなかった。祖父は炉端で、向こう脛を真赤にして榾火をつつきながら、何かしきりに、夜更かし勝ちな菊枝のことをぶつぶつ言ったり、自分達の若かった時代の青年男女のことを呟いていた。そして時々思い出したように、どうしても我慢がならねえ……と言うように、菊枝の眠っている部屋の方へ、太いどら声で呼びかけた。

「菊枝！　菊枝！　もう、午になってはあ！　もう、てえげに起きだらいかべちゃは。」

こう祖父は、幾度となく呼び起こした。けれども、彼女は、すやすやと眠っているらしく、なんとも答えなかった。

彼女が自分自身の時間を惜しむ近頃の癖から、もう一つは口やかましい祖父に対する反感から、眠り果てぬ眠りを装うているのだということは、祖母も母も感付いていた。が、母は、彼女の真実の母でないという遠慮から、彼女を起こしに行くだけの大胆さはなかった。祖母はまた、軒の下や庭に散らばっている塵を掃き蒐めながら、揺り起こしに行こうか、いま揺り起こしに行こうかと思いながらも、また一方では、自分の娘以上に手をかけて育てた子供だけに、ただの一分間でも余計にじっと寝かして置きたいような気がした。

「本当に、今時の娘達は気儘なもんだ。」

祖父はとうとう独り言を始めた。

「夜は夜で、夜業もしねで、教員の試験を受けっとかなんとかぬかして、この夜短かい時に、いつまでも起きてがって、朝は、太陽が小午になっても寝くさってがる。身上だって財産だって、潰れてしまうのあたりめえだ……」

彼女の継母は、祖父のこの呟きを、快く聞き流しながら、背中に小さな子供を不格好に背負い込んで囲炉裏で沢山の握り飯を焼いていた。

祖母は戸外から這入ってきて、あまりにも口やかましい祖父に、不機嫌な視線を投げかけた。併し、祖父はそれどころではなかった。もう既に焼き飯も焼けているのに、菊枝が起きてこないと言うだけのことで、魚を漁りに行く時間が遅くなるのに、まだ朝飯にならないのだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

から。子供達も、学校の時間に急きたてられながら、飯になるのばかりを待っていた。

「学校さ行く小児も、やきもきしていんのに……」

祖父は最後にこう呟いて、真赤にやけた向こう脛を一撫でして腰を伸ばした。そして、菊枝を蹴起こしてやるというような意気込みで、彼女の寝ている部屋に這入って行った。

二

みんなが食卓のまわりを襤褸束を並べたように取り巻いて、いざ食事にかかろうとしているところへ、彼女の父親が他所から帰ってきた。みんなは彼を眼で食卓の傍へ招いた。

父親は近所での見聞を、断片的にものがたりながら食卓に就いたが、食事にとりかかってその種を失った。祖父は重い口調で命令的に訴えた。

「松三。少し菊枝さ、言ってきかせて置がせえちゃ。俺言ったて、馬の耳さ念仏だから……」

祖父はこう切り出して松三の顔を見、菊枝の表情に見入り……。

菊枝の頬はほんのりと紅がさして、自然に項垂れてしまった。そして彼女は、まるで飯粒を数えるように、飯粒の上に、箸の上に、小さな動作を繰り返した。

「まだ初稼ぎだで、山仕事で疲れてんのがと思えば……」

祖父は容赦なく続けた。

「この忙し時、朝っぱらから、寝床の中で、書物を見てがるんだから……本当に呆れだもんだ。」

松三は、けれども何も言わなかった。——そんなこと、別に腹立てる程のことでもあるまい——そんな表情で飯をかき込んだ。菊枝は、全く済まないことをしたと言うように、そのまま消えてもしまいたいと言うように、ほんのり、顔を赤らめて、息を殺して碗に盛った飯をもてあましていた。

「こんなことは、俺が言わなくたって……松三はなんと思うか知らねえが。俺は、百姓の娘がこんなごっては……」

祖母が横から、祖父の顔を睨むようにして、そして祖父の言葉尻を捉えるように言った。

「そんなこと言ったって、爺つあまや。何しろまだ十六だもの……裁縫習えにもやんねえのだもの、考えで見ればこのわらしも……」

祖母はまず自分自身の哀れなオールライフを涙含ましく思った。

「考えで見れば、可哀想ださ。ほんでも、朝っぱらから、寝床の中で、書物を読んでるなんて、百姓の娘が……」

「学校の先生様になんのだぢゅうもの、何、いがすべちゃ。」と、黙り続けていた継母が突然口を入れた。

松三は食事の間、一言も口をきかなかった。食事が済むと、しかし悠長に煙管をくわえて、何事をおいても、この事を解決してしまわねばならないというような表情で、けれども、全く落ち着き払った態度で……。

「菊枝！　台所が済んだら、ちょっとここさ来うまず。」

菊枝は台所からおどおどしながら出てきて、窮屈な雪袴の膝を板の

間に折った。

父親は、掌でぽんぽんと煙草の吸い殻を落として、眤っと、項垂れた菊枝の顔を凝視めた。

「菊枝！　貴様は、年も行かねえのに、いろいろど気がついて働いでくれで、仲々感心な奴だと思っていだら、もっての外の考えをもっていんなや？」

菊枝は、黙々として項垂れ続けた。祖父は幾分後悔の気持ちで刻み煙草を燻らし続けていたし、祖母はかばってやらねばならぬ折を、おどおどしながら待っていた。

「今までは本当に、全く感心な奴だと思っていたのに……今からは、そんなごってはなんねだでや。この通り、俺家ど言うもの、稼ぐ者ってば、俺とお前ばかりだべ。母は母で病身だし、他は、年寄りわらしばんだ。――そして、貴様になど、どんなことあったって、受かりこなどねえんだ。毎日それにばり一年もぶっ続け勉強した、かしゅくさんせえ、落第したんだもの。」

「百姓の子は……」祖父が突然口を入れた。「みっしり百姓のごとを習って、いいどこさ嫁に行けば、それでいいんだ。学で飯を食うべと思わねえで……」

「そんな、柄であんめえちゃ。」

継母は台所の方から出てきて、罵りを含んだ微笑に口を歪めながら言った。

菊枝はその言葉がぎくりと胸にこたえた。が、彼女はちらりと睨むような視線を走らせたきり、尚も項垂れて黙り続けた。

「ようく聞いて置いでな、菊枝！　今おめえに稼ぎを休まれたら、父が一人で、どうもこうもなんねえんだから……」

こう言う祖母の表情は、ことにその眼は、菊枝の心に温かな、しかも涙ぐましい影を落とした。

「そんでもこんでも、試験を受げて見っと言うのなら仕方がねえげっとも、ほんどき、旅費も何も自分で心配しんだでや。俺は、不賛成なごどには金ば出さねえがら……」

父はこう言って煙管を敲いた。

「そんなごと無えんだから、早く稼ぎさ行ぐ支度をしてはあ……」

祖母は傍らから、庇護うように言った。

菊枝は渋々と立ち上がって、だが、すぐに山ゆきの支度にかかった。

三

菊枝はすっかり沈んでしまって、細い山路をのぼる時から、父親の踵のあたりに視線を下ろしたきり、全く黙り続けていた。松三は、どうかしてこの不快な沈黙を破りたいと、しきりにその緒を考えたり四辺を見廻したりしていた。

草の芽はゴム細工のような、さもなければセルロイド細工のような新芽を土の中から擡げていた。エボナイトのような弾力と光沢を持った、あらゆる樹木の梢に群がる木の芽は、ずんずんと日毎にふくらんで行き、いろいろの小鳥は思い思いの音色で木の枝に囀り廻っていた。けれども、何ら沈黙を破るべき機会を与えられなかった。

その沈黙！　しかも、もの哀れな、涙ぐましい沈黙は正午になって

も続いていた。松三は、母親の無い自分の子、この力無い表情を視続けることに堪えられなく思った。

「菊枝！」と、松三は突然、思い出したように彼女を呼んだ。

その時、彼等父娘はちらちらと崩れかかる榾火を取り巻いて、食後の憩いを息ずいていたのであったが、菊枝は野を吹く微風に嬲られて、ゆれる絹糸の縺れのような煙を凝視めて、悩ましい空想に追い縋るという様子であった。が、彼女は、父親から呼びかけられて初めて僅かに顔をあげた。

「おめえな、菊枝……」と、父親は重苦しい口調でこれだけ言って、深く煙草の煙を吸い込んだ。

「え」と菊枝は、声に出しては言わなかったけれども、そんな風な表情で、人なつこい眼を父の方に向けた。

「おめえ、本当に試験を受げんのだごったら、みっしり勉強しなげえなんねえんだ。」

「ほだげっとも……」

菊枝は、父親のあまりに当て外れたこの言葉に、なんと答えていいのか解らなかった。

「汝あ、家にいでは、とっても勉強なんか出来ねえんだから、山さ来て勉強しろ。山さ書物持って来て……汝あ伐る分ぐれぇ、父が伐っから、汝あな一生懸命に勉強しろ。」

父親のこの言葉は、菊枝に取って涙含ましかった。それは、あまりに温かい、涙含ましい言葉であった。

「ほだげっとも……ほだげっとも……」

「何、構うごとねえ。家の人達はあの通りみんな不賛成だげっと、俺だけば、汝を百姓にしたぐねえと思って……」

「爺様や継母さんは、（家のごとは考えねで、自分ばり楽するごと考えでる）って言うげっとも、俺は稼いだって大したごとも出来ねえから、何が外のごって……」

「そんなごど……汝あも仲々難儀だ。汝あの実母も、百姓などしねえげ、まだまだ死ぬのでなかったべ……」

彼は、若くして死んだ愛妻の死の前後を、その哀しむべき半生を心の中で思い描いた。――それは菊枝を生んで間もなく、当然床の中に臥していなければならないうちに、ちょうどそれが田植えの時期だったので、無理に田圃へ出たのがもとで、産褥熱が昂じ、ひどい出血の後に、忙しい時期にお産をしたことを気にもみながら、夢見心地のうちに死んで行ったのであった。

「俺、月給取るようになったら、毎月なんぼかずつでも家さ送って寄越しべと思って……」

それは菊枝の真情であった。彼女は、同級の誰彼が、みんないろいろの方面へ進んで行って、自分一人が野良に残されたことを悲しく思いはしたが、決して父親の苦しい生活を忘れてはいなかった。自分自身を救うと同時に父親をも、いやそれよりも自分を捨てて父親を助けねばならない……そういう気持ちから受験を思い立ったのであった。

「そんなことは心配しねえでも、まあ、みっしり勉強して……試験を受げさ行ぐ時の旅費ぐらい、父がなんとかしっから、こっそり行って受げて来い。」

「俺、父と二人ばりだら、試験なんか受げさ行かねげっとも……」
菊枝の両の眼には、いつの間にか熱い涙が湧いていた。
「父は、汝を百姓にしたぐはねえと思って……貧乏さえしてねげ、女学校さもなんさもやりでえのだが、貧乏なばがりに、ろくに書物も買ってやれねえが……」
「ちゃんや！　ちゃん！……」
彼女は涙に光る眼を上げて、こう父親を呼んだが、父親のその温かい情に対して、自分の感情をどう表現していいか解らなかった。彼女は、もう、試験を受けずに、手不足な我が家のために一生懸命に働くと言いたかったのだ。
「俺は、汝を百姓にしたぐねえ。汝も難儀だげっと、そいつばり勉強してる人達と一緒に試験を受げるなんて……まあ明日からは、山さ書物を持って来て勉強しろ。父が汝あ分まで伐っから……」
松三はこう言いながら、自分の美しかった若い妻が、菊枝の母親が、いかに惨めな半生を送ったかを、農村の女達がいかに虐げられるかを思った。
太陽はだいぶ西に傾いて、淡い陽脚を斜めに投げだしていた。緑の新芽は思い思いの希望を抱き、梢火はとっぷりと白い灰の中に埋もれていた。

――大正十五年（一九二六年）『文藝市場』四月号――

土竜

一

灌木と雑草に荒れた叢は、雑木林から雑木林へと、長い長い丘腹を、波をうって走っていた。
茨の生える新畑は、谷から頂へ向けて、ところ斑に黝んでいた。
梅三爺の、一坪四銭五厘で拓く開墾区域は、谷のせせらぎに臨んで建った小屋の背後から続いていた。
今は緑の草いきれ。はちきれるばかりの精力に満ちた青草は、小屋の裏から起こるなだらかなスロープを、渦を巻き巻き埋めつくしていた。青草の中には紅紫の野薊の花が浮かびあがり、躑躅の花が燃えかけていた。そして白い熊苺の花は、既に茅の葉にこぼれかけていた。無理に一言の形容を求めれば、緑の地に花を散らした大きな絨毯であった。そして、開拓されたところは黒々と、さながら墨汁をこぼしたかのように、一鍬毎に梅三爺の足許から拡がって行った。
「父！　この木、惜しいな。熊苺の木だで……」

養吉は鎌で、小さな灌木を叩いて見せた。

「ヨッキは、まだそんなごとばり。そんな木、なんぼでもある。」

「なあ、父！」

五歳になるよしが追従した。

養吉は、ちらとよしの方を睨むようにしたが、自分も否定していたと言うように、すぐに惜し気もなく鎌を入れた。

養吉は三年前に母を失って以来、父の自分を呼ぶ呼び方によって、父の気持ちを解することが出来た。「ヨーギャ」と呼ぶ時は、一番寛大な時である。「ヨーギ」と呼ぶ時も、「ヨギッ」と呼ぶ時も、まだそれ程おそれることはないが、例えば今のように、「ヨッキ」と焦げつくように言う時、もしそれに少しでも抗ったら、すぐに黒土を打付けられるのに相違ないのだ。

併しヨーギは十二の少年ながら、一層元気に、草を刈り灌木を伐り倒して、父親の鍬先を拓いて行った。よしは黒奴の小娘のように、すっかり土にまみれながら、父親が土の中から掘り出した木の根を、一本ずつ運んで行って、冬籠りの薪を蒐める役を、自ら引き受けていた。

梅三爺は、自慢の重い唐鍬を振り上げ振り下ろしながら、四年前に、——この村にいたのでは、何時まで経ってもうだつがあがらないから、どこか、遠くへ行って、一辛抱して、自分の屋敷だという地所を買い求めるぐらいの小金でも、どうにかして蓄めて来たいと思うから。——という書き置きをして行方を晦ました伜の市平のことを思い続けた。「あの野郎も、手紙ではいいようなごとを言って寄越したが、どんなごどをしてがるんだか？　天王寺の竜雄さんなんざあ、中学校を出て、東京で三年も勉強してせえ、他所さ行ったんじゃ、とっても駄目だって帰って来たじゃ。あの野郎も、帰って来っといいんだ。」梅三爺は今日もこんなことを思い続けているのであった。

市平がいなくなって以来、彼のことは殆んど思い諦らめ、折々思い出しても、ただ身の上を案じているに過ぎなかったのだが、最近になって、ああして手紙を寄越されて見ると、梅三爺は市平を呼び寄せたいような気がした。腰が痛み、身体が草臥れるにつけても、「あの野郎せえいれば、俺もこれ、じっかり楽なんだが……」と思わぬわけには行かなかった。世間の噂が、竜雄と市平とをいい対照にしているように、それは梅三爺の心からも離れないことであった。

「畠おこすがね？」と遠くから、聞き慣れない声で呼び掛けるものがあった。

梅三爺は唐鍬の柄を突っ立て、その声のする方を見た。誰かが此方に近付いて来た。併し冬籠りの小屋に漂う煙と、過激な労働の疲労で、すっかり視力の衰えた、赤く爛れた彼の眼は、判然とそれを見ることが出来なかった。

「ヨーギ。誰だ？」

梅三爺は、睜く眼と共に口まで開いて、低声でこう訊いた。

「誰だべ？　——郵便配達であんめえが？」

「なに？　配達？　ほんではまだ、兄つあんどこがらでも来たがやな。」

「なんだ？　巡査様だがもしせねえ。」

養吉は、雑草の中から伸びあがった。

「なんだど？　巡査様だど？」

その訊き方はちょっと狼狽ていた。同時に梅三爺の顔には、さっと不安の表情が流れたようであった。「市平が、何か悪ごどでもしたのであんめえがな？」と彼は思ったのであった。彼は、倅の市平のことについては、ただそればかりが気になっているのであった。

「巡査様、なにしに来たべな？」と、梅三爺は不安の中から繰り返した。

「白いズボンはいで、黒い服だげっとも……巡査様でねえがな？」

よしはぽかんと口をあけて、雑草をわけて近付いて来る白ズボンの人を、背伸びをして見極めようとした。蒼白い餡のような洟が、今にも口の中に垂れ込みそうであった。

眼鏡をかけた白ズボンの青年は、いよいよ梅三爺とは五六間程の距離になった。爺は、それが巡査でないことだけは判った。が、どうも役人らしいので、二度三度と、四度までも続けざまに頭を下げた。「頭せえ下げて置けば、大概間違いはあんめえから……」という意識が、無意識のうちに彼の心に動いていたのであった。

「竜雄です。天王寺の竜雄です。」と、青年は名乗った。

「あ、竜雄さんでがすか？……」

梅三爺は思い出したように、また懐しそうに言って青年の方へ歩み寄った。梅三爺は、その若き日の過去を、幾年となく竜雄の家に雇われてきたのであった。市平もまた、田園遁走までの四五年を、父親の後を引き継いでいたのであった。

二

刈り倒された青草を藉いて二人は腰を下ろした。

「今日は、なんの方でがす。山遊びしか？」と梅三爺は訊いた。

「山遊びなんて、僕もそんな暢気なことはしていられなくなってね。今日は、山巡りに来た序でなものだから……どうも草盗まれて、萱まで刈られんので……」

「あ、ほうしか。」

爛れた眼を睜くようにして、梅三爺はもう一度彼の姿を見直した。

「山は、まったくいいですね。」と竜雄は、あらためて四辺を見廻すようにした。

「え、山はね。宜がすちゃね……」

「どこを見ても、みんな緑だ。実に新鮮な色彩だ。それに、土の匂いがするし……。ほんに、田舎に限るな。」

彼は独り言のように言った。

梅三爺も爛れた眼を睜るようにして四辺を見廻した。鼻もうごめかしてみた。――しかし、雑草の緑が沁みついた梅三爺の瞳には、決して新鮮な眺望ではなかった。すがすがしい土の香も、既に全身に沁みつくして、彼の嗅覚を刺激するようなことはなかった。美衣美食の生活者が、美衣美食を知らぬと同じ悲しさが梅三爺の上にもあった。

「東京になざあ、こうえな青々したところ、どこにも有すめえもねえ。」

「え。ずうっと郊外、在の方へでも行かなければ……。なんと言っても、田舎のことですね。全く、百姓の生活に限る。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com